

## 深川木場の歴史と文化 ②

## 木場の変遷 (2)

江東区深川江戸資料館

前号では、木場の変遷の中で、材木商の木置き場が、江戸市街から、隅田川を越えて深川に移転してきた寛永期(1624～44)の頃の事情を見てきました。この時成立した、深川で最初の木場は、「元木場」と呼ばれます。今号は、その後近年まで繰り返された木場の移転の歴史を概観していくことにします。

## 築地24カ町の成立と木場

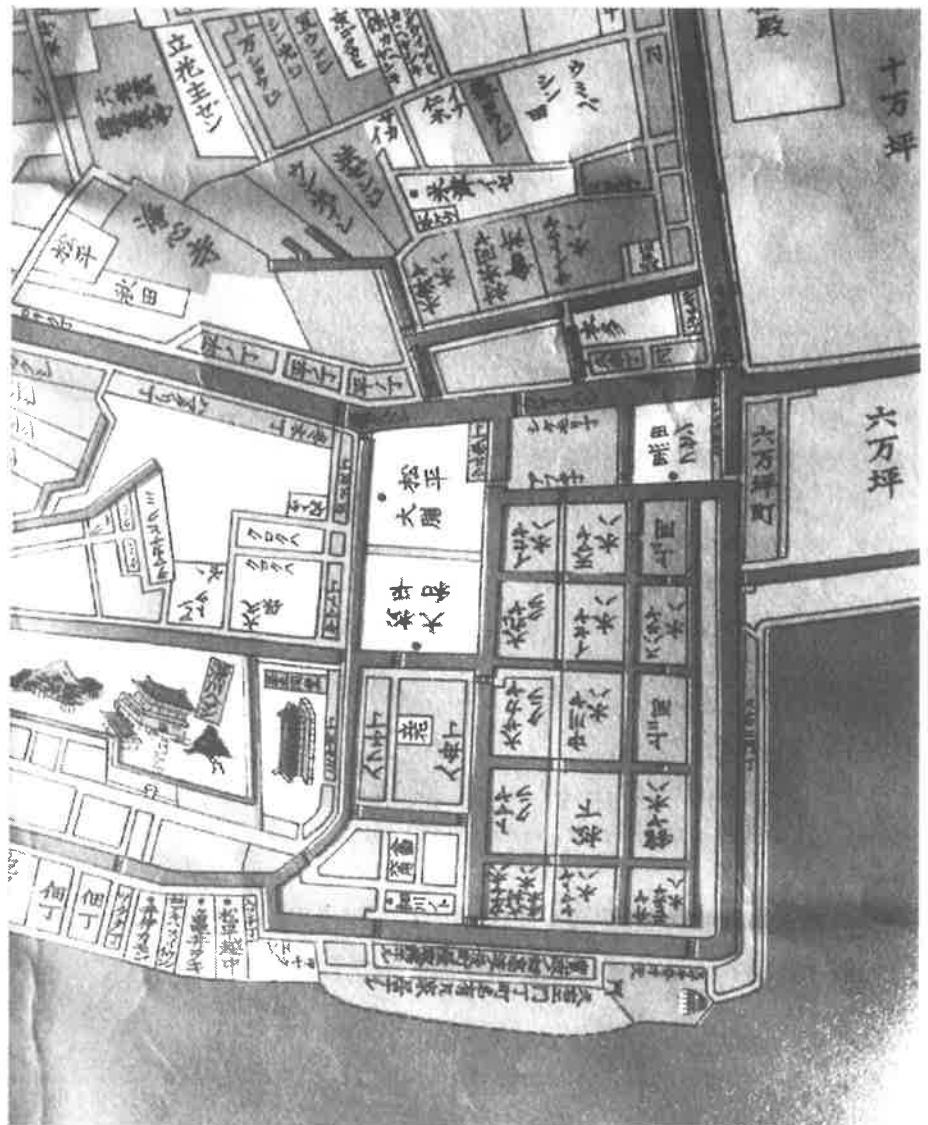
寛永の頃から佐賀・福住・永代周辺に営まれた「元木場」は、元禄12年(1699)、移転することになりました。

元木場は、隅田川河口の様々な物資の流通拠点として都合のよい場所にあったため、幕府の政策により、木置き場はその東に移転することになったのです。代地として幕府から与えられたのは、深川築地町と呼ばれていた木場・平野・三好一帯でした。

しかし、この低湿地の造成は未完成のままで、あとは材木商たちの手に委ねるといった条件であったため、手に負えず、返上して猿江に移転します。

2年後の元禄14年になると猿江の地も幕府用地として収公され、2年前に比べて干拓が進んだ深川築地町が再び払い下げられます。材木問屋たちが自費で土手や堀を整備し、橋を架け、ここに昭和の新木場移転まで繁栄を極めた「深川木場」が成立したのです。約9万坪(29万7,000平方メートル)の広さであったといわれます。現在の地下鉄東西線木場駅付近、都立木場公園一帯の地がそれです。

その内外には、東平野町・西平野町・伊勢崎町・山本町・西永町・三好町・元加賀町・石島長・末広町など、24の新しい町が開かれ、「木置き場」であるばかりでなく、



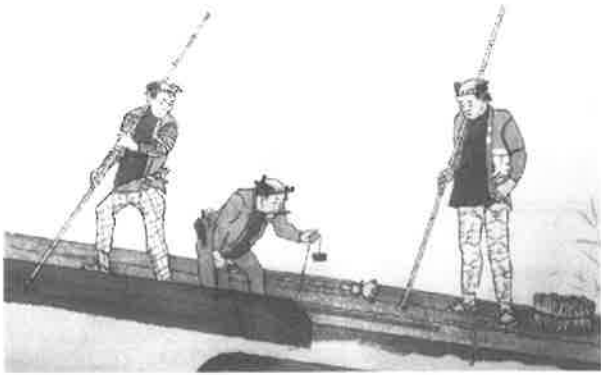
天保14年(1843)『天保御江戸絵図』

江戸の材木取引の中心地となっていきました。

## 深川の拡大と木場の発展

築地24か町の成立とはほぼ同時期に、隅田川に新大橋・永代橋の2橋が完成し、江戸東郊の深川の地は、江戸市街と距離を縮め、都市化を遂げていきます。正徳3年(1713)には、深川の大半が代官支配から、代官と町奉行の両支配になりました。深川が名実ともに江戸の町の一部となったのはこの時期といえるでしょう。

木場は江戸市中の材木取引の中心として活気を呈し、紀伊国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門のような材木豪商を生み出し、後には「通」や「粋」とよばれる独特の



『木場名所図会』（当館所蔵）より  
「丸太検尺糸回し」丸太を計る川並の様子を描いた絵。

美意識を醸成し、江戸町人文化の発信地となっていきます。投機性の高い材木取引にあたる商人たちの間から、金離れのよさ、こだわりのないさっぱりとした人情を特徴とするこれらの文化が興隆したといわれています。これらが「江戸的なもの」として定着をみた宝暦～天明（1751～89）期において、木場は江戸を代表する地名となっていたといえることができるでしょう。

江戸中の材木を一手に扱い繁栄を極めた一方、木場には広大な貯木場や掘割があつて水面を渡ってくる風は夏でも涼しく、野趣も残る土地で、ここに別荘を営む文人たちも少なくありませんでした。木場に住んだ人々については、号を改めて述べることにします。

冒頭に挙げた江戸図は、天保14年（1843）に摺られた『天保御江戸絵図』のなかの木場の部分です。きちんと15の区画に分かれ、それぞれ屋号が記されています。元禄14年の移転時、15軒の間屋があつたと伝えられますが、この形が幕末近くになっても踏襲されていたことが知られます。

## 明治以降の木場

明治4年（1871）、東京材木問屋組合が結成され、木場は、新たな出発をしました。木場材木問屋・板材木問屋・熊野問屋・川辺問屋に大別できる問屋と、仲買・荷主の関係は江戸時代のままで、取引の様式や商習慣も変わりませんでした。

その後、大正12年（1923）の関東大震災による壊滅的な被害を経て、昭和8年（1933）頃になると、問屋と仲買の組織関係は、徐々に解体していったようです。問屋は専門化し、経営のしかたも近代化されていったのですが、やがて、太平洋戦争による統制の影響を受け、従来からの木場の組織も解散せざるを得なくなりました。戦後の昭和25年（1950）に、この統制は廃止され、新たに自由営業の材木取引が始まりました。

## 新木場移転

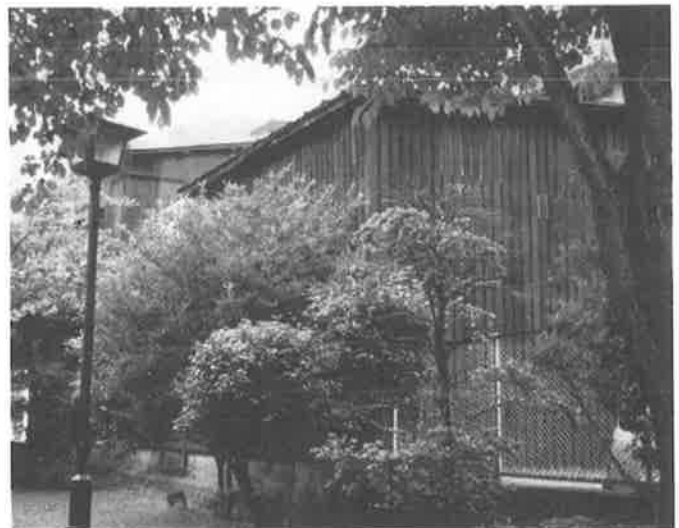
昭和30年代にはいと、いわゆる高度経済成長が

始まり、「富岡八幡の手古舞」の復活などにも窺われるように、木場に活気がよみがえりました。しかし、このころから、周辺の地盤沈下や公害問題、東京の交通事情の悪化が原因となって、木場の移転の話が持ち上がりました。また、高度経済成長期の建設ラッシュで、在来の木場では貯木量が不足となった事態も、移転の推進に拍車をかけました。

こうして木場の新木場移転は、昭和49年（1974）から始まり、昭和57年（1982）には完了しました。元禄以来、木場の貯木場と隅田川を結ぶ幹線水路として機能してきた油堀川も、これに先立つ昭和52年に埋立てが完了していました。

新木場は地面115万平方メートル、水面59万平方メートルの面積に達します。昭和63年には、営団地下鉄（現東京メトロ）新木場駅が開業しました。木をふんだんに使ったデザインのこの新しい駅は、未来に向かう新木場の姿を象徴しているかのようです。

平成5年現在、新木場は約8,000人の人が働く町に発展しました。



親水公園となった福富川に面した旧材木店（平野）



新木場の情景（平成16年撮影）